

紀 海音の正本をめぐつて

―近世演劇資料ノート(4)―

鈴木 光 保

一 豊竹若太夫正本「本朝五翠殿」

前稿「近松正本の二、三について」(本誌第二十六号)において、近松在名の谷村清兵衛板「凱陣八嶋」(十行三十丁本)が、下つても享保二年秋以前に刊行された可能性を指摘した。その根拠としたのは、板元が正徳三年(一七一三)より後、享保二年(一七一七)秋以前において、「京寺町通仏光寺下ル町」から「同寺町通四条上ル二町目」に移転した外部徴証と、当正本の刊記に移転前の住所を刻する事実とであつた。

しかし、板元の移転年次推定に用いた資料は多くなく、しかも直接それに就かないで引用によるものを含んだ。推定になお不確実の要素はないか、その推定の上に立つ「凱陣八嶋」刊行の下限が動くことはないかとの不安が残る。さらに徴すべき資料が望まれるところである。

が、他に求める前に架蔵の一資料を加えるべきであつた。すなわち、本項の見出しに言う豊竹若太夫正本「本

朝五翠殿」である。さし当り必要な書誌事項は、原題簽に

本 朝
こすいてん 豊竹若太夫
直 伝

とあることと、次の奥書を有することとである。

右此本は我等持本の通ちがひなく
板行仕候尤初心けいこのため也されば
こと／＼くかな書にしてくきりふし

しやう三味せんのりかたほと拍子

三重おくりの品、秘密を残さず

改正せしめひろむるもの也

京 寺町通四条
上ル式町目 谷村清兵衛板

改めて説くまでもなく、竹本義太夫門下の竹本采女が、師を離れて豊竹若太夫と改名し豊竹座の櫓を上げたのが

元禄十六年（一七〇三）、その後曲折を経て同座が盛運に向かい、若太夫受領して豊竹上野少掾藤原重勝を称したのは享保三年（一七一八）正月であつた。その時の舞台が紀海音作「鎌倉三代記」であり、大黒舞の節事をもってはやされ、大当りを取つたことは「今昔操年代記」に記すところである。

右よりして、「豊竹若太夫直伝」と明記する「本朝五翠殿」の正本は、若太夫の受領以前、すなわち享保二年末までの刊行になるものとしなければならぬ。そして、その刊記に見る板元の住所「寺町通四条上ル式町目」は、前記のごとく移転後のものと考えられるから、その移転は享保二年を下り得ないとすべきである。

よつて前稿において、浮世草子「和漢遊女形氣」の刊記によつて下した、板元谷村清兵衛の移転年次の下限を享保二年秋以前とする推定は補強され、その移転前の板行にかかる近松在名の「凱陣八嶋」が享保二年を下らない、言い換えれば近松在世中の上梓であることもより確かに言い得ることになる。

この上にはいよいよ他の近松在名本「凱陣八嶋」との關係が究められ、同作を西鶴の手になるものとする「今昔操年代記」の記述との関わりが問われなければならない

いが、いまだその用意整わず、今は援用の若太夫の一本についてな少しく記しておきたい。それが未報告の資料と思われるからである。

☆ ☆ ☆

「近世邦楽年表 義太夫節之部」（昭和二年刊）は、その正徳元年（一七一二）の備考欄に、

外題年鑑（明和板）は本年正月豊竹座「本朝五翠殿」上場となせど、未だ豊竹若太夫の正本を見ず

と注する。そして同作の豊竹上野少掾正本を、享保十六年（一七三一）九月以前の刊行と認められるもので年代不明とする諸作の中に置いている。上野少掾が再び受領して、豊竹越前少掾を称したのが同年九月三十日なるに基づく処置である。

その後において、この「近世邦楽年表」の記述を訂正すべき正本発見の報告あるを、寡聞にして知らない。最近における海音正本のもつとも纏つた調査を含む、横山正博士の「浄瑠璃操芝居の研究」（昭和三十八年刊）によれば、「本朝五翠殿」の諸本としてあげられるのは

山本九兵衛板十一行本

西沢九左衛門板七行本

の二種であり、前者は太夫名・作者名を欠き、後者は上

野少掾・紀海音の署名があると注される。(第一章第二節 藍海音関係丸本の奥書)

ここに第三種として紹介したい架蔵本はおおよそ次のごとくである。

半紙本一冊、菊花模様を押出しにした薄藍色の原表紙に前記の原題簽を存し、全二十八丁。板外に

こすい(丁付)

、第二段以下の各段首を含む丁

の板心にそれぞれ(二)と(五)と刻む。内題「本朝五すいでん」、その下に署名などない。初丁表は本文九行、他はすべて十一行。奥書は前記のごとくであり、「近松浄瑠璃本奥書集成」の(奥書七十)に一致する。裏表紙の心にした標題紙とおぼしきものの半葉に「……武(?)者校全」とある。

ところで、祐田善雄教授はかつて、現存の「本朝五翠殿」の正本が何れも「浄瑠璃古今序」と合本であり、また明和本以下の「外題年鑑」に並記されていることから、両作を同時の初演と推定、その年代を、「古今序」に其俤も節付も耳に残りて目に浮む筑後掾の世話事とあるによつて、筑後掾役(正徳四年九月十日)後と考証された。(「紀海音の著作年代考証とその作品傾向」国語・国文第六巻第七・八号)

ところが右に紹介した若太夫正本は「浄瑠璃古今序」を併せ持たない。合本の形式が同時初演に基づく本来のものか、或いは同時所演などの事情による後の形式なのか、疑えば疑われるところである。所見の西沢板上野少掾正本(松竹大谷図書館蔵本)が、「本朝五翠殿」の部(七十九丁分)と「浄瑠璃古今序」の部(四丁分)とは、丁付、板心とも通してなく別に起こされていることなどは後者の場合を思わせないでもないが、その板心の「五」と「本」との両様は却つて合本形式を前提とする性格を示しているとも言える。

望まれるのは、谷村板に非る若太夫正本「本朝五翠殿」の発見であり、併せて板元谷村清兵衛の移転年次の確定である。

付記、前稿で谷村清兵衛の移転の上限を、長谷川強氏の考証によりつつ「通俗諸分床軍談」の刊記によつてのみ推定したが、所見の一例をここに加えておく。

絵入鎌倉武家鑑(全六巻)刊記

正徳三年己正月吉日 京寺町仏光寺下ル町

谷村清兵衛版

(第六巻終丁)

二 豊竹上野少掾正本「山樹太夫吉原雀」

前項で正本板元の移転のことについて一度ならず言い及ぶところがあつた。似たことを同じく海音の正本「山樹太夫吉原雀」についても心にかけている。

それは内題下に「豊竹上野少掾」とある十二行二十丁本で、次の奥書を有する。

右此本者依為望望文句

音節等悉校合加秘密令

開板者也

太坂南久宝寺町堺筋東へ入北側 正本屋
七兵衛

京売所

二条通寺町西へ入南側

正本屋
喜右衛門

正本屋七兵衛は「書買集覧」の増訂版に登載、所在が大坂と示されるのみで、そのよるところを矢島玄亮編「徳川時代出版物集覧」とする。その矢島氏の編著を未見のまま、手がかりを「近松浄瑠璃本奥書集成」に求めると、正本屋七兵衛板行の近松正本は合板を含めて十七種を数える。そしてそれらの奥書から板元の移転の事実を知り得る。すなわちその住所が

A 大坂天神橋筋「和」泉町

B 大坂南久宝寺町堺筋

の二様になつてゐることである。

そこで、移転の年次を規定するためにその刊行した正本を奥書の類別に初演年代とともに書き出してみる。この場合、初演年代は祐田善雄教授の「近松年譜」(「解釈と鑑賞」昭和四十年三月号)によらせていただくこととする。

A 天神橋筋泉町所在当時の刊行正本

1 奥書十四(「奥書集成」参照、以下同じ)

心中重井筒 宝永四年

丹波与作待夜の小屋ぶし 宝永五年

百合若大臣野守鏡 宝永七年

※ここに架蔵の一資料を加えておく。

酒呑童子枕言葉(十行本) 宝永四年

2 奥書四十七

最明寺殿百人上臈 元禄十四年

3 奥書十八

△鶴屋合板▽

盛久 貞享三年

淀鯉出世滝徳 宝永五・六年

今宮の心中 正徳元年

※以下は奥書が部分的に相違する。

佐々木大鑑

貞享三年

大磯虎稚物語

元禄四・五年

義経追善女舞

元禄十年

姫山姥

正徳二年

凝静胎内退

正徳三年

B 南久宝寺町所在当時の刊行正本

1 奥書十九

△鶴屋合板▽

曾根崎心中

元禄十六年

夕霧阿波鳴渡

正徳二年

娥哥かるた

正徳四年

鏈の権三重帷子

享保二年

2 奥書五十四

日本振袖始

享保三年

これによればA群は貞享三年から正徳三年までの間に初演された作品であり、B群は「曾根崎心中」を別とすれば、正徳二年から享保三年の間に初演を見た諸作である。よつて板元の天神橋筋和泉町から南久宝寺町への移転をおおよそ享保初年とする推定が浮かんてくる。B群で例外とした「曾根崎心中」が、天理図書館所蔵の八行本であり、旧蔵者の高野辰之博士が、享保二年竹本座の「曾根崎心中」再演時、もしくは享保四年曾根崎芝居の

竹本喜世太夫による追善興行の折の正本とされた（「日本演劇の研究」第一部(六)、曾根崎心中劇の変遷）ものであつてみれば、先の推定はより確かとなる。

ところで、ここに注目すべきは「曾根崎心中十三年忌」の存在である。所蔵者横山正博士の紹介されるところ（「浄瑠璃操芝居の研究」第四章第三節）に従えば、原題は

曾根崎心中十三年忌 豊竹若太夫
直 伝

とあり、本文は天理図書館所蔵の八行本「曾根崎心中」と同一板で、奥書は次のようである。

右此本者為懸望文句

音節等悉校合加秘蜜

令開版者也

正本屋

大坂天神橋筋泉町

七兵衛板

京売所

二条通寺町西 江戸町南側 喜右衛門
二本屋

さて、横山博士のご指摘（前掲書）のごとく、「十三年忌」と称するこの正本は、お初・徳兵衛の情死の年、元禄十六年（一七〇三）より数えて、正徳五年（一七一五）の刊行とすべきである。よつて板元七兵衛の南久宝寺町

への移転はこの正本刊行後でなければならず、正徳五年を測りえないと考えられる。

次にその下限をさぐつてみる。先にあげた天理図書館本「曾根崎心中」の裏表紙に

享保五年子ノ正月吉日 川上氏

なる墨書があり、それが高野博士の、同本を享保二年竹本座再演時の正本と考定された根拠であつた。その所説は「曾根崎十三年忌」の発見・紹介によつて訂正はされたが、墨書によつて正本の刊行を享保五年正月以前と考えるのは動かないところである。とすれば、板元七兵衛の移転の下限は享保四年と言える。

よつて、七兵衛板行の近松正本の検証によつて、おおよそ享保初年と推定した板元の移転は、「曾根崎心中」の増補本二種によつて、正徳五年（一七一五）以降享保四年（一七一九）までの間と限定することができる。

続いて正本屋喜右衛門について見る。これは言うまでもなく屋号鶴屋で、「浄瑠璃本屋の元祖」（「書賈集覧」）はともかくとして、最も早くから見られる板元である。

同集覧はその所在を、「京都二条通御幸町西入南側 天明の初め天町通夷川上ル町に移れり」とするが、既に「二条通寺町西へ入南側」の刊記を見ており、移転の事

実はなお跡づけを要する。

そこで、先の正本屋七兵衛の場合と同じく「近松浄瑠璃本奥書集成」によつて、その所在地別に正本刊行の状況を見ると次のようになる。（初演年次の最古と最新の正本を掲出）

A 二条通寺町西江入ル町

出世景清 貞享二・三年

津国女夫犯 享保六年

A' 二条通寺町西江入町南側

盛久 貞享三年

鑑の権三重帷子 享保二年

B 二条通寺町角

吉野忠信 元禄十・十一年

浦島年代記 享保七年

B' 二条通寺町南側角

薩摩歌 宝永元年

心中宵庚申 享保七年

C 寺町通二条上ル町

凱陣八嶋 貞享二・三年

釈迦如来誕生会 正徳三年頃

A と A'、B と B' はそれぞれ同一と考えて、右からだけ

でも二度の移転が認められる。Aは先に見た正本屋七兵衛との合板正本のみに見られる記載であるが、A・Aを通じて、その正本刊行の状況からして、少くも享保六年（一七二一）までの在住が確認される。さらに元禄十四年（一七〇一）七月初演の「神事曾我」の絵入狂言本の刊記に

二条通寺町西江入ル町南かわ

正本屋喜右衛門新板

とあり（古典文庫「上方狂言本三」参照）、貞享元年（一六八四）三月上梓と推定される相模塙正本「弘法大師誕生記」の刊記にも、

二条通寺町西へ入町 喜右衛門開板

とある（古典文庫「古浄瑠璃集 角太夫正本（一）」参照）から、鶴屋のA・A在住期間は当然B・B、またCに先立つと考えられる。

次にB・BとCとの先後関係は、C在住当時の刊行にかかる正本がすべて「江戸通油町鶴屋喜右衛門」との合板であることに手がかりが求められる。江戸の鶴屋について「書寶集覧」はその所在を「江戸大伝馬町三町目後通油町」と註し、大伝馬町時代の刊行書目として、延宝三年（一六七五）刊「心学男女鑑」以下、享保八年

（一七二三）刊「西海軍記」までの七種をあげる。この記載により、またBに「江戸通油町鶴屋」との合板の一例「槍狩剣本地」が存する（「奥書集成」奥書九十六参照）ことを思えば、京都の鶴屋のC在住期は、B・Bの後とするのが妥当である。こうして正本刊行の状況によつて、鶴屋の移転を、「二条通寺町西江入ル町」から「二条通寺町角」さらに「寺町通二条上ル町」へと跡づけたが、それぞれの移転年次の確定は、刊年を刻する他の資料を必要とする。今の場合、さらに溯つての二条通御幸町ないし丁子屋町在住時期については直接関わりを持たないのでふれないが、なお「寺町竹屋町下ル町」在住の問題がある。

その住所は、前稿にも引いた森修氏の「凱陣八嶋の諸版について」のご論考によつて知り得たところで、東洋文庫蔵本の十行三十二丁本「凱陣八嶋」の前書に見られるという。

「八前書本文略」

寺町竹屋町下ル町

鶴屋喜右衛門

山本角太夫正本売所

寺町五条上ル丁西側

梅村宗五郎

この鶴屋の住所が、先の移転の跡づけを修正することはないかとの疑念がある。

これについては、連名の「梅村宗五郎」が延享（一七四四～四八）以降において確認されとの、「書賈集覧」増訂版の記述を書き留めて、精査を後日に期したい。

以上、海音の正本「山榊太夫吉原雀」の新出かと思われる一本を掲げつゝも、もつぱら板元の移転を追つて来た。結果としてはそのおおよそを跡づけながら、確定

南川維遷伝の研究

一 一儒者の生涯

一 緒言

- 二 南川維遷の生涯 概説
- 三 南川維遷の生涯 第一期
- 四 南川維遷の生涯 第二期
- 五 南川維遷の生涯 第三期
- 六 結語

には至らず、安永板「外題年鑑」によつて同作の初演を享保五年とする通説に、積極的に加え得るところとはならなかつたが、板元の移転年次の確定が、正本規定の一視点として有効な場合のあることを予見させる。以後もこの面への留意を期するものである。

（豊橋東高校）

岩 田 隆

二 緒言

南川維遷（享保十七～天明元、享年五十）は、「閑散余録」上下二巻の著者として、纔に近世儒学史に名を留めている北勢の外様小藩（竜万巻千石トイウ）荻野侯土方氏に仕えた一儒者である。「国書解題」には次のように云う。